

「日々の当たり前」

赤磐市立吉井中学校 三年 尾関 佑斗

「あんだ、ユニフォーム忘れとるじゃろ」
試合会場に「き二十分、母に言われました。
確かに、バツクを確認しても、緑はありません
が、白のユニフォームはありません。中学最
後の公式戦、そして勝てば決勝、相手は岡山
県北部を代表するような格上のチーム。そん
な重要な時に、この失態。時計を見ると、試
合開始まで残り一時間二十分ほど。家から会

赤磐市立吉井中学校

場まで往復で一時間十分なので、ギリギリの
所でした。ですが、そんな心配は母が急いで
取り押してくると言ってくれたので、な
なり、僕は母を信じて、気持ち切り替えて
ウ「ミニンカアッ下に集中することかできま
した。とうとう、ウオミニンカアッでも試合
の準備も終わり、開始まで残り五分。ス
ニは無理かな、自業自得よなと思いはじめた時
母の車が駐車場に見えました。さすが母さん
と思ひながら、急いでユニフォームを受け取

心配は

り、ありがとうと言ひ、な人とか試合に出場
するところができました。しかし、絶対に勝つ
と意気こみ挑んだ試合は、残念ながら敗北。
試合の後は、なんだかいつてもよソも時間がた
つのが早く感じて、すぐに帰る時間になりま
した。帰ろう、と母の車に向かっ
て歩き始め
た時、僕は涙がでそうになりました。悔しか
つたのです。試合の前から相手が相手なので
勝てる可能性は低いと分かっ
てはりたひです
が、いざ負けると、とても悔しひものがあり

赤磐市立吉井中学校

ました。それで、僕のドライドが邪魔をし
て、な人とか涙かひっ
こみました。絶対に涙
をたさなひ、そう思っ
ていまこた。そんなこ
とを考えていると、いつのまにか、母の車の
前に、ドアを開け、いざ母を目の前にした時
涙が止まらなくなりました。しかも母は、僕
か泣くのを分かっ
ていたかのようひ、運転席
ではななく、後部座席に座っ
ていて、僕が泣き
止むまで、こよくやっ
たよ。とこた励まし
の言葉をかけて寄りそっ
てくれました。初め

ての悔し泣きは、意外にも頭だけは冷静なもので、三年間早かったなあ、またこのチームでサッカリしたいなと色々考えていました。思ひ返せば三年間、両親に支えられてばかりでした。週に二三日ある練習は両親が疲れてくる中で、仕事を早上がりするなとをして送り迎してくれました。それに加え、土日にはたいてい試合があり、朝早くにバスの集合場所に送られてくれ、バス代などの金のお事も負担だ。たと思ひます。こんな風に、両親にして

赤磐市立吉井中学校

きてもらった事を思い出せばキリがありません。そんな中、僕が一番ありがたかったなと思っ、ていふことがあります。それは、僕がどんな状態でも寄りそって続けてくれたことです。例えば、僕が中学一年生になり、チームに入りましたの頃、周りにはみんな知らない人で、僕には人見知りをしてしまったり、練習に行きたくなかった時期がありました。そんな時も、「サッカリと一緒にしてたら仲良くなるよ」と言ってくれ、僕を説得してくれました。そのおかげで

友達もできて、三年間楽しくサッカーを続け
ることもできました。また、サッカーをして
いると少し大きくなりました。僕はそのせいでサッカ
ーにハマりました。僕は、そのせいでサッカーにハマ
るもチキーンが下がった時がありました。
その時も、両親は僕に押しつけて何かをして
くれたか、「何かし」を言ってくれて励まして
うしても思ひ出せなかった。母と父に聞
いてみることにしました。すると、「当たり前

赤磐市立吉井中学校

前の事をしてきただけじゃけん、覚えてない
わい」といふ返事。僕はすこりこをしてく
れたのだと思っただけで、少しむづかしくし
ました。ですが、徐々に気づいて考えをみると
当たり前が一番すこりこという事に気がつきま
した。送り迎えも、チームや塾への月謝も子
供に寄リそうにも全て、父と母にとって、
当たり前前のことでした。でも、僕は当たり前
のこととは思いません。なので僕は、父と母
の事を純粋にすこりこと思っっています。また

僕は子供です。これから親に迷惑ばかりかけ
て、その度に父と母にとっての当たり前前
の事をしてもらい、大人に成長していきま
す。それでもやっぱり嫌なので、いつかは
父と母に当たり前のように親考行できたら
なと思っ
てります。なので、その第一歩として、家
に帰ったとき、日々の当たり前前に対して、
「あ
りかとう」を言おうと思ひます。

赤磐市立吉井中学校